HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	川端康成文学における絵画［論文内容及び審査の要旨］
Author(s)	李, 雅旬
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第13840号
Issue Date	2020-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/78695
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	Li_Yaxun_abstract.pdf, 論文内容の要旨

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）　　氏名：　李　　雅　旬

学位論文題名

川 端 康 成 文 学 に お け る 絵 画

・本論文の観点と方法

本論文は、作家川端康成が初期から晩年までの間に執筆した全作品の中から、絵画と関係の深い作品を取り上げて論じ、川端文学の表現様式を、絵画との関わりという観点から新たに究明したものである。川端の言語観と絵画観を探りながら、初期の小説において言葉で絵を描出しない理由や、川端文学における言葉と絵の共犯関係、あるいは相互補完的な関係、また、言葉で絵を記述する際に用いられる対義結合や省筆のレトリック、さらには、物語の表に直接には登場しないものの、物語の展開に関与する川端所蔵の絵画作品や、一枚の挿絵から小説を創出する方法などについて、理論的かつ具体的に解明し、川端文学における方法としての絵画について総合的に論じた。

・本論文の内容

本論文は作品と絵画との関係の性質に応じて三部構成を採る。第一部「小説が作り出す絵画」では、戦前期の川端小説に登場する架空の絵画に着目し、絵画は言語化できないとする川端の絵画観を基に、戦前期の川端小説に登場する、テクストに描出されていない絵画について論じた。

第一章では「夫人の探偵」について、夫人が騙された言葉と絵を中心に論じ、言葉への過信の問題と、それを補強するものとしての絵の問題について検討し、事件を言葉と絵の共犯によるものとして論じた。言語不信を表明していた川端が言語を過信する人物を登場させ、悲劇に遭わせたのは、彼らの言語に対する過信を風刺するためとした。

第二章の「春景色」論では、先行研究において川端の「主客一如」の認識と結びつけられてきた「彼」と外界との関係や、「竹林と杉林とのある風景」を描いた絵に対して、「象と駱駝とが通つた、梅の絵」という題をつけるべきだとする風景画とその題の関係を、換喩法・緩叙法などのレトリックの観点から解釈することを試みた。絵によって表象されていない象と駱駝と梅は、絵の題という言葉によって表象され、絵と題は相互補完的な関係となる。風景画とその題をめぐる「彼」の模索が描かれていることから、この作品を、絵画制作のプロセスを記述した、川端による一連の絵画制作小説の系列に含まれる最初の作品として位置づけた。

第三章では、〈絵を描くことを描くこと〉という主題に焦点を合わせ、「童謡」を絵画制作小説として分析した。絵画が時間の要素を捨象した芸術であるのに対して、小説は継起する出来事の時間的順序を営む芸術であると見なす芸術観を持つ川端は、絵画を小説のなかに取り入れる際に、時間的経過を加える方法の一つとして、〈絵を描くことを描くこと〉をテーマに選び、それを物語るために小説の時間を任意に組み替える錯時法を用いた。この作品では、制作中の画家が表象され、絵画制作のプロセスが記述されてはいるが、その絵の内容は描出されない。川端が志向したのは、言葉で絵を再現することではなく、言語の「ヴイジユアリゼイション」そのものだからである。言語表現による「ヴイジユアリゼイション」を高める方法として、川端はむしろ絵自体を描写しないことにより、読者の空想や想像をかき立てる方法を選んだものとした。

第二部「小説に取り入れられた絵画」では、昭和二〇年代の川端小説に登場する、実在の絵をめぐる言説表現の特質に注目した。「夢」に登場する絵は対義結合のレトリックによって、「花のいのち」に引用された岸田劉生の牡丹の絵は象徴の手法によって、「明月」に引用された宗達の絵は省筆表現によって記述・描写されているととらえた。

第四章では、「夢」に見られる表現と認識をめぐる川端の工夫が、「少女の顔に老婆の顔を重ねたやうな泣き笑ひ」という二つの顔を一枚の絵に同居させて、強烈な色彩とデフォルマシオンに満ちた新しい様式を特徴とする絵を表出し、また言語表現として対義結合のレトリックを用いることにより、あらゆる二元論を解消することを目指したものとして理解されている。このような対義結合的な表現は川端文学において広く認められるが、いずれも川端一流の、二元論的な世界認識への抵抗としてとらえられるとした。

第五章では「花のいのち」について、登場する人物芳子の父所蔵の岸田劉生作「竹籠に三輪の牡丹の花を盛つた、十号の油絵」が、実際に川端の手元にあった絵であることを論じた。作中には牡丹の絵についての記述が多く、絵の中の牡丹の花は芳子の母の象徴となっていることを示した。また「花のいのち」は、これまで未完の小説とされてきたが、焦点化の理論を中心とする語り論的な方法から見れば、このテクストは開かれた終結へと向けられたものであることが理解できるとした。

第六章の「明月」論では、これまで未詳であった作中で言及されている新聞記事（漢文学者の随筆）の典拠を初めて明らかにし、川端がその新聞記事をどのように省略し、あるいは誤って引用したのかを実証的に分析した。墨絵をめぐる言説に見える省筆表現と、川端の小説における文体とが一致しており、川端の目指す表現方法が作中に登場する宗達の墨絵の描き方に託されているととらえた。

第三部「小説において変容される絵画」では、まず「白雪」を対象として、テクストに登場していない絵画作品が物語の展開に関与することについて考察した。また昭和三〇年代に入ると、『美しさと哀しみと』のように、挿絵や川端所蔵の絵画作品に描かれたイメージが川端の文学テクストに生かされていることが多くなってくる。さらに、「白馬」を取り上げ、実在の絵に触発されて虚構の絵をテクストに登場させる作品についても論じた。

第七章では「白雪」を論じ、弘子と小泉の逢引に小道具として与謝蕪村の「実」の俳画を取り入れ、さらに、「虚」の俳画と蕪村の「宜暁」の趣向が通じていることから、蕪村の絵を最も生かした小説として位置づけ直した。

第八章・第九章では『美しさと哀しみと』を取り上げ、それぞれテクストの内部の絵と、テクストの外部に存在する絵との関わりについて検討した。第八章では、作中作の「嬰児昇天」の絵の位置づけを検証することにより、この小説を音子が絵画を通して、大木と文子の家庭に復讐を遂げる絵画制作小説であることを明らかにした。第九章では、挿絵を手がかりに、小説の結末と、それに関連する最後の一枚の挿絵や、古賀春江が描いた「煙火」との関係を論じた。

第一〇章の「白馬」論では、掌編「白馬」の中で東山魁夷の挿絵に描かれたイメージがいかに川端の小説テクストに生かされているのかを考察した。テクスト内には絵を描く行為があり、その絵が重要な役割を果たすことによって、「白馬」は挿絵小説であると同時に絵画小説にもなっている。「白馬」に至っては、絵画との関わりが一層深くなっているのである。

結論として、絵画は昭和初期から最晩年に至るまで川端の重要な創作方法の一つであったことが解明された。昭和一〇年まで、川端文学には登場する絵についての描出がなかったが、やがて川端は、自ら多くの絵画作品を蒐集するにつれ、絵画は言語化できないというスタンスを破り、絵画を言葉で記述・描写するようになっていった。さらに、昭和三〇年代以降の川端文学においては、絵画の方法が様々な形で変奏していく。このように、絵画が川端の小説に与える影響は次第に強くなっていったと論じて本論文を締め括っている。